

今回の企業大学訪問では、本当に貴重な経験を沢山することができたと思う。自分なりに今回思ったことをまとめた。

まず初めは、霞が関ビルディングで行われた笹川平和財団とディレクトフォースの話だった。

近藤玄大さんによる義手についての講演、題は、【ものがたりとしてのものづくり】だった。そこでは、今までの義手の「手がないことを他人に気付かれないようにする」という概念を捨て、メガネや時計と同じようなウェアラブルアイテムとしての「個性の象徴」という新しい概念を作り出したということが1番印象に残った。確かに近藤さんの作った義手は、これまでの義手とは大きく異なり、スタイリッシュで「手がない」というマイナスのイメージをプラスに変えるものだったと思う。

近藤さんは22~23歳のときにアメリカ・カリフォルニア州・バークレーに留学され、日本との文化の違いに気づいたと言っていた。日本では和を重んじる教育が中心だが、アメリカは人種も様々、肌の色も違う中でどれだけ自分をアピール出来るかに焦点を当てた教育がされているようだ。言語も価値観も異なる中で、【もの】は見せるだけで伝わる世界共通言語だとおっしゃっていた。それを聞いて私は感心した。

近藤さんのモットーとして、【気軽な選択肢としての義手の開発】というものがあるそうで、これまで十数万かかっていた義手を十万円以下でユーザーに提供するなどの工夫を欠かしていないとおっしゃっていた。義手の制作方法をオープンソースで全世界に公開することで、世界中の人々が制作できるようにしたりなど、これまでの型に囚われずに自分のやりたいことをやるというやり方は、自分の将来を考える上でとても参考になった。

近藤さんの、まずは目の前のことを一生懸命に・出来ることからやって確かめてみるなどの生き方は自分も真似してみたいと心から思った。とても濃い時間を過ごせたと思う。

ディレクトフォースでは、合計3名の方にお話を伺うことができた。この研修の前に両親にどんな方々にお話を伺うのか伝えたところ、本当に素晴らしい方々にお話を伺うことが出来ると分かったので、楽しみでもあり、緊張もした。

1人目の山田正実さんは、米・英・蘭に12年滞在された方だ。

山田さん曰く、昔はグローバルではなくインターナショナルの考えが強く、「国と国でどう付き合っていくか」が重要視されていたようだ。

しかし、世界大戦や冷戦を経て、自由主義と共産主義の壁(ベルリンの壁がその象徴)が消えたことで、全ての国が同じレベルで戦わなければならない状態になったようだ。

このように競争相手が全世界になった事で、保護貿易やイギリスのEU離脱、トランプ政権などの「アンチグローバル」の考えが生まれたという。でもこれはグローバル化の中の一

部に過ぎないともおっしゃっていた。私はこのような視点で世の中を見たことが無かったので、とても新鮮だった。

また、日本は終身雇用や年功序列などの考えから、グローバル化によって実力重視の欧米の考えが取り入れられるようになったそうだ。

日本では昔、トップダウンと言って、立場が上の社長などが立場が下の社員に命令するという形を採っていた。これは決定に時間がかからずに済むが、極度の意見が出た時に対処することが難しいという。

しかし、欧米ではボトムアップと言って、社員が社長に意見を言えるという方式を採用している。これは独創的なアイデアが生まれやすいが、決定までに時間がかかり、悪く言うと平均的なアイデアしか生まれず、変化が起きにくいという。

山田さんは、この2つのやり方を合わせて、2つの良いところを取り出せるように努力すべきだとおっしゃっていた。

高校時代にやっておくべきことを聞かれると、山田さんはチャレンジすることだと答えてくれた。日本にずっといたって、競争相手は世界なのだから、世界の役に立てるような「必要とされる人」になることが大切なのだそうです。そして、常に覚悟を持って物事に取り組むことが大切なのだそうです。

グローバル化していく世界と付き合っていくためには、グローバル化以前に日本のこと・自分のことを知ることが大事だとおっしゃっていたので、これを心に留めて生活したいと思った。

2人目の藤村峯一さんはブリヂストンの米国本 CEO の方だ。

今現在、日常にビックデータを始めとしたグローバルが組み込まれているという。そのビックデータも AI 化されるなどしているため、**Only One** を求められているそうだ。

また藤村さんは、日本とイギリス・アメリカの教育差についても教えてくださいました。

アメリカは大人と子供の区別がはっきりしていて、例えば、大人が運転する車に乗せてもらえない、寝る時もベッドは別などが挙げられるそうだ。そのような教育がなされると、子供は自然と独立したくなり、早く親元を離れて 1 人前になりたいと思うようになるというのだ。しかし、日本では大人と子供の違いが曖昧で、協調性・団体行動重視のため、子供は自然と独立したくないと思うようになるらしい。教育がこんなにも影響を及ぼすなんて知らなかったのが驚きだった。

また、プレゼンテーションの大切さも教えてくださいました。自分で意見を言えるようになることがこれからの世界を生きていく上で重要になるそうだ。

藤村さんの所属するブリヂストンは、生産の 7 割・人材に至っては 9 割が海外なので、英語は命だそうだ。

世界はローカルの成り立ちだとも教えてくださいました。この場合の「ローカル」はそれぞれの国の言語・慣習などだ。それぞれの国のルールをきちんと理解して、より良い国際社会を作

って行くことが大事だとおっしゃっていた。

今の日本人には、このような教育により、上からの判断を待つという傾向がある。それをできる限り無くし(もちろんその美点もあるのだが)、国際社会に対応できる人材の育成が必要だということだった。

藤村さんは PDCA という言葉を教えてくださった。これは、Plan,Do,Check,Action の略で、間違ってもいいからまずはやってみることが大切だということだった。この PDCA を意識して生活したいと思った。

3 人目の前川美湖さんは、海洋生物の研究をされており、国連でも働かれている方だ。前川さんは、海洋生物の保全についてを国連に提言する仕事をしているそうだ。

資金補助よりもビジネス全体をサポートしたいという考えから国連に入ったそうだ。

やりがいは、発展途上国では、まだ出来ること(可能性)が一杯あるので、「貢献」できる重みが違うので、それを感じる事が出来ることだとおっしゃっていた。

今回のこの 3 名のお話はそれぞれに共通している事があったと思う。それは、日本の生き方を大切にしながら、アメリカ式の「自分を主張する」ことに慣れること。まずは自分のことをよく知ること。若いうちに色んな経験を積むことだ。この 3 つを意識して自分も国際社会にとって役に立てるような存在になりたいと思った。

次は企業・大学訪問だ。私達は東京大学附属動物医療センターという所へいった。獣医師になりたいと小学生の頃から思っていたので、実際の獣医学の実態を掴みにいった。

この病院は、東京大学農学部の弥生キャンパスの敷地内にある病院で、一般向けの治療の他に、研究もしているという病院だ。普通の動物病院では分からない病状・複雑な手術・精密検査を受けるために、他病院の紹介でくる動物が多いそうだ。

今回は米沢准教授にお話を伺うことができた。年間 2 万件、1 日に 60 件、そのうち 10 件は初診だそうだ。来る動物は殆ど犬と猫である。

私は猫を飼っているので、動物病院の大体のイメージは着いていたが、至る所に工夫が施されており、舌を巻いた。

オーナー(飼い主。この病院ではそう呼んでいた。)から預かった動物達は様々な手段で検査をうける。

この病院には普通の地方の病院にはないような MRI や CT をはじめとした検査器具があった。これらの設置には莫大なお金がかかる上、普通の動物病院ではそもそも必要にならない(そういう疾患を持った動物が来ない)ため、大学病院でないと検査出来ないらしい。

また、この病院には東京大学の学生の研修医がいることも大きな相違点の一つだと米沢先生はおっしゃっていた。

動物と人のちがいで、人は血液型が 4 種類だが、犬は 2 種、猫は 3 種あるそうで、また、人の血液と違って、保存することが難しいそうだ。このため、病院には供血用の犬猫

がいるそうだ。また、これは人と同じで、血液を輸血する時はクラスマッチ試験を行い、血液が凝固しないかどうか調べるそうだ。

先述した通り、他動物病院の紹介で来る動物達は、〇〇疑い・神経症状(断定が難しいという)・この病気のこの有名な先生に見てもらいたいというようなことで、この病院を訪れるという。昔から東大は、リンパ腫の研究で有名だそうで、この日もリンパ腫の手術をする動物がいた。私達はその手術を見学することが出来た。

手術は「わかりやすい」ことが、やる決め手になると言っていた。この細胞が悪い、ここを切除する、などのわかりやすい原因があれば出来るという。しかしやらないに越したことはないので、そこはオーナーさんと話し合っただけで最善の答えを出すことが必要だとおっしゃっていた。できない理由として、ガン細胞が転移してしまっているなどが挙げられる。

手術が決定したらいつ行うか決め、入院する。

手術では体に吸収されやすい糸を使っているなど、工夫が随所に見られた。

このような貴重な体験をさせて頂いて、将来のイメージをつかむことが出来た。その中でも 1 番心に残ったのが最後の米沢先生の話だ。私は今まで「獣医師になりたい」という漠然としたイメージだけでいたが、獣医師になるには医者と同じくらいの知識の習得を必要とすること、その割には給料は医者の半分くらい、大学の学部も限られること、忙しすぎるのか離婚率が他の職業よりも高いことなど、シビアな 1 面も知ることが出来た。獣医師は命を扱う職業だから、オーナーと自分の意見が合わなかったりすると、やる意味を見いだすことが出来なくなるという話も、凄く心に残った。改めて社会の厳しさを知った気がした。正直驚いたが、今回このような経験が出来たからこそ生かせることの方が多いと思う。米沢先生は獣医師になりたいと思うことが 1 番大切だとおっしゃっていた。どれをとっても貴重な経験をさせて頂いた。本当に感謝しかない。

この日の最後の OB・OG の方との座談会では、大きく 3 つのことを学んだ。

1 つ目は、自分で何がしたいか、なぜなのかを考えることの大切さ。

2 つ目は「良い大学」にするのは自分次第だということ。

3 つ目は自分で「やらなければ行けない状況」をつくることだ。

2 日目の東大見学は、Fair Wind の方々と一緒に東大を回ることが出来た。

これまでの東京大学のイメージは堅苦しくて私なんかには手の届かない大学だと思っていたが、学生さんもフレンドリーで打ち解けやすかったのも、将来の選択肢のうちの一つにすることができたと思う。

この 2 日間はとても濃い時間で、ここに書き記せ無かったことも沢山ある。実際に見て、体験することの大切さ、日本のトップを見ることで感じる場所は沢山あった。この経験を無駄にはせず、これからの動力にしていきたいと思う。本当に貴重な経験だった。もっと多くの人にこの経験をして欲しい。